

平地先住民族の失われた声を求めて

——日本統治下の台南における葉石濤の考古学・民族学・文学——

大 東 和 重

はじめに

葉石濤（一九二五—二〇〇八年）は戦後の台湾文学を代表する作家・評論家の一人である。^①

日本統治期に台南市白金町の豊かな家に生まれた葉石濤は、私塾で学んだ後、一九三二年、台湾人が通う末広公学校に入学し、三八年、主に台湾人が通う台南州立第二中学校（戦後は一中と改称）に進んだ。同校の卒業生には、詩人の楊熾昌（一九〇八—一九四年）、李張瑞（一九一一—五一年）らがあり、中途退学には作家の楊逵（一九〇六—一九五五年）がいる。早くから文学を愛好し、日本文学や海外文学の翻訳を濫読、創作を始める。四三年、台南二中卒業後は、台北で西川満（一九〇八—一九九年）主宰の『文芸台湾』の編集を約一年間手伝い、龍瑛宗（一九一一—一九九年）、呉濁流（一九〇〇—七六年）、楊逵ら数多くの台湾人作家と面識を得た。^②四四年台南に戻り、市内の宝国民学校の教師となるが、徴兵され日本兵として終戦を迎えた。

戦後も台南市で小学教師として勤めながら、日本語での創作を継続していたが、一九五一年逮捕され、三年間の獄中生活を送る。出獄後は、嘉義県・台南県・宜蘭県・高雄県の小学校などに勤めつつ、長い沈黙を経て、一九六五年から中国語での創作を開始し、短篇や評論を孜孜として書きつづけた。

代表作に、短編集『葫蘆巷春夢』（台北：蘭開書局、一九六八年）、『紅鞋子』（台北：自立報社、一九八九年）、『西拉雅族的末裔』（台北：前衛出版社、一九九〇年）、『台湾男子簡阿淘』（台北：前衛出版社、一九九〇年）、『異族的婚礼』（台北：皇冠出版社、一九九四年）などがある。評論には、『台湾郷土作家論集』（台北：遠景出版公司、一九七九年）、『台湾文学史綱』（高雄：文学界雜誌社、一九八七年）などがある。著作は『葉石濤全集』全二十三卷（小説五卷、隨筆七卷、評論七卷、資料一卷、翻譯三卷、台南：国立台湾文学館・高雄：高雄市政府文化局、二〇〇六―九年）に収められている。⁽³⁾

台南に生まれ育った葉石濤は、戦後生計のため離れてからも、生涯台南を舞台とする小説を書きつづけた。現在台南の国立台湾文学館のそばには、葉石濤文学紀念館（元山林事務所）が設けられ、台南を代表する作家として敬愛されている。葉の作品を紐解きながら台南の街を歩く、文学散歩の書籍も複数出ている。⁽⁴⁾ 陳正雄によれば、小説計百五十篇のうち、台南を舞台とするものは約百二十篇に達するという。⁽⁵⁾

本稿では、葉石濤の戦前の考古学・民族学・文学に対する関心と、戦後の創作活動とをつなぐ作業をしてみたい。日本統治期に文学少年だった葉石濤は、日本語を通して日本や海外の文学に接触し、一九四〇年代前半に黄金時代を迎えていた台湾の日本語文学から多大な影響を受けた。その一方で葉は、台南二中の生物の教師だった金子壽衛男から影響を受けて、考古学を愛好するようになり、さらに台南第一高等女学校の教師で民族考古学者の國分直一からの刺激で、平地先住民族である平埔族にも関心を抱くようになる。金子や國分の研究の背後には、いったんは失われたと思われていた平地先住民族の声を探し求める、複数の日本人学者たちの姿があった。文学と考古学・民族学への愛

好は、戦後の活動にも影響を残したと推測され、特に台南周辺の平埔族であるシラヤ族を描いた『西拉雅末裔潘銀花』にそれは顕著である。葉石濤のシラヤ族を描いた作品については、陳秀卿・林玲玲「発現平埔 葉石濤与西拉雅族書写初探」に、葉の台湾観の視角からの検討がある^⑥。本稿では、葉石濤が金子や國分からどのような刺激を受けたのか跡づけるとともに、平地先住民族について日本統治下の台南周辺でどのような探索がなされていたのか、スケッチしてみた。

一 考古学への愛好——金子壽衛男と博物同好会

葉石濤の代表作の一つに、自らの運命をたくましく切り開いていく、台湾の平地先住民族、平埔族の女性を描いた短編の連作がある。台南周辺に住む、シラヤ族の「潘銀花」を主人公としたこの連作は、葉石濤の代表作の一つとされ、近年日本語にも訳された^⑦。まず四作を収めた『西拉雅族的末裔』（台北：前衛出版社、一九九〇年）が刊行され、のち一作を加えて『西拉雅末裔潘銀花』（台北：草根出版、二〇〇〇年）となった（以下、連作の総称としては『西拉雅末裔潘銀花』を用いる）。「西拉雅族的末裔」「野菊花」「黎明的訣別」「潘銀花的第五個男人」「潘銀花的換帖姊妹們」を収め、タイトル通りシラヤ族の女性の半生を描く。舞台は台南市、及びシラヤ族の居住地である新市や隆田など、台南近郊の小都市や農村地帯である。

ストーリーを簡単に紹介しよう。新市庄新店（現在の新市区）に代々住むシラヤ族の潘家は、自らの土地である蓮霧畑と、台南市内に住む地主龔家の小作で生計を立てていた。一人子の銀花は、学校教育は受けず公学校に通ったこともなかったが、頭の回転の速い、よく働く娘だった。たまたま近所へ狩りに来て怪我をした、龔家の次男英哲を助けたことから、その運命は大きく変わる。台南に出て龔家に仕えることになった銀花は、やがて、花園小学校・台南

一中を経て台北医学専門学校を卒業した英哲と結ばれ、子をもうける。しかし、自由奔放で不羈独立の精神を持つ銀花は、「自らの世界で、自らの両手を使って働き、自らと赤ん坊を養わねばならない、そうしてはじめて立派なシラヤ人といえるのだ」と考え、龔家を出る。

『西拉雅末裔潘銀花』は、戦前の日本統治期から戦後の国民党政府時代を背景に、台南とその周辺地域を舞台として展開する。シラヤ族の潘銀花は、漢族で金持ちの御曹司である英哲を最初に、台湾の複雑な政治状況や民族構成を象徴する複数の男性たちと交わりながら、厳しい時代の中を生きていく。「野菊の花」では、太平洋戦争で日本の戦局が悪化する時代を背景に、二番目の男である福建系の漢族、王土根の後妻となり、隆田で新しい生活に入るが、夫は米軍機の爆撃で死ぬ。「黎明的訣別」では、戦後の二二八事件前後を背景に、国民党政府の弾圧から命からがら逃げてきた知識人の朱文煥を匿うも、朱はまもなく特務に連れ去られる。「潘銀花的第五個男人」では、農作業中に大陸から来た兵隊に襲われて第二子を妊娠するところから始まり、山東から来た外省人の汪書安と見合いを経て結婚する。最後の「潘銀花的換帖姉妹們」では、商売を大きくし、縁あって苦しい境遇の女性たちを受け入れるなどして増えた大家族を切り盛りする、たくましい姿を描く。葉によれば、平埔族を描いた小説は、葉以前に王幼華『土地与靈魂』（台北：九歌出版社、一九九二年。ただしシラヤ族ではない平埔族を描く）があり、葉の後には葉伶芳『鴛鴦渡水』（台北：皇冠出版社、一九九七年）があるくらいだとい⁸う。

物語の随所に、シラヤ族に関する記述が挿入されている。舞台としては、新化郡の新市庄新店や知母義、曾文郡の官田庄隆田（番子田）など、台南市周辺のシラヤ族居住地が選ばれる。作中ではシラヤ族の言葉が、「Ma」（父）、「Na」（母）、「Abiki」（檳榔）、「Ibutun」（福建人）、「Zamarit」（天神）、「Arit」（阿立祖）、先祖）のようにローマ字で、数は多くないものの記される。とはいえ、後述するように日本統治末期には、シラヤ族の言語はほぼ失われていた。作中でも銀花は、シラヤ族の古い歌を歌うことはできたものの、シラヤ語はわずかな単語を覚えるのみで、龔家の若

旦那に訊ねられても、「Zarun」(水)・「Uran」(雨)・「Tabin」(靴)・「Baun」(海)・「Baratun」(スカート)などの単語を思い出すばかりだった。

作中では平埔族に伝わる伝統的な宗教上の慣習も描かれている。平埔族はその大部分が、十九世紀半ば以降の宣教師による布教で、キリスト教に改宗した。しかしシラヤ族の伝統的な「阿立祖」に対する信仰が残存する地域もあった。「西拉雅族的末裔」には、旧暦九月十六日に行われる祭りへの言及があり、「野菊の花」には、陶製の壺が置かれた祭壇に「阿立祖」へのお供えとして檳榔と砂糖が用意されているとの記述がある。生まれたばかりの赤ん坊を「阿立祖」に保護してもらう「Kei Eiya」も古くからの習慣である。また「厓姨」という女性の憑依者は、銀花の人生を予言する存在としてくり返し登場する。

葉石濤はシラヤ族に対して、どのように関心を持ち始めたのだろうか。葉はのちの回想で、戦前の生活を振り返り、生まれ育った古都台南は漳州・泉州出身者が居住者の大多数を占めたため、「私の小さく狭い生活空間には「その他の民族」が出現することはなく、客家人や山人（＝台湾原住民族）も同じくこの土地に住んでいるのだという考えがなかった」と記している（『我的客家経験』⁹）。そんな葉に、旧制中学時代、多民族の住む台湾という土地を発見するきっかけを与えたのは、台南二中で教えを受けた、生物学者の金子壽衛男と、金子と連携して台南周辺で考古学の発掘に従事していた、民族考古学者の國分直一の存在だった。

台南二中時代の葉石濤は、文学少年であると同時に、考古学少年でもあった。葉石濤は人生を語った『葉石濤先生訪問記録』で、「私はもともと文学をするつもりはなかった。中学時代は、考古人類学者になろうと夢見ていた」と語っている。¹⁰ 葉石濤が考古学の発掘に熱中したのは、恩師の一人で博物科の教員だった、金子壽衛男（一九一四—二〇〇一年）の影響だった。

考古学少年だった台南二中時代について、葉石濤は「考古夢」（『民衆日報』一九九八年一月十八日）に詳しく回想

している。⁽¹¹⁾ 葉が二中に進学したのは一九三八年で、翌年、葉が二年生るとき、金子壽衛男が「博物同好会」を組織した。日台の生徒たちが参加する中、葉も友人白坂勝に無理やり誘われて加わった。

「博物同好会」と称するからには、動植物を研究するクラブのはずだが、私は全く興味がなかった。しかし金子先生には敬意を抱いていた。博物科の授業において、先生の態度は真面目で穏やかで、台湾人の劣等生を差別することもなかった。金子先生は痩せて小さく、黒縁のひどい近視用の眼鏡をかけていて、顔色は青白く、栄養が足りない様子だった。⁽¹²⁾

当初博物学に興味のなかった葉石濤だが、金子壽衛男の熱意溢れる指導のもと、徐々に考古学にのめり込んでいく。金子は、佐賀県有田に生まれ、神戸一中を経て、一九三七年東京高等師範学校を卒業した。⁽¹³⁾ 恩師に誘われて台南二中へ赴任し、約四年間奉職する。一九四一年台北帝国大学理農学部に移り、敗戦後も一九四八年末まで留用された。戦後は大阪の名門高校である府立市岡高校で教員として長く教鞭を執りつつ、貝類の研究を続けた。

貝類が専門だった金子は、貝類や化石を採集するため、台南周辺の海辺や遺跡を徒歩で回った。集落の周囲に食用に供した貝殻を遺棄した場所があれば、これを詳細に調査し、さらに年月を経て貝塚となったものを発掘した。金子は自らの探索を、ユーモアを込めて、「「ごみため」見学」と称した(「「ごみため」雑記」『民俗台湾』第三卷第五号、一九四三年五月)。採集に回る金子は、いつも質素な身なりで、カーキ色の軍服のような服を着用し、弁当と水筒、発掘物を包む新聞、測量の器具を背囊に入れ、登山杖と鋏を手にかけていた。

葉石濤の回想によれば、金子は國分直一と同じく、文学の愛好者でもあった。金子は台南を去る際に、挨拶に伺った葉に、ロマン・ロランの『魅せられたる魂』などの岩波文庫を何十冊も贈り、「作家になりたいなら、世界の名著

を広く読みなさい、井の中の蛙になつてはいけないう」と励ましたという。¹⁴⁾

葉石濤は博物同好会に入ってから、発掘の魅力にとりつかれる。発掘用の道具を購入し、金子に引率されて、同好会の熱心な仲間とともに、日曜日ごとに何時間も歩いて遺跡に向かった。続々発見される先史時代の遺跡、それに自らも関わっていることに、葉石濤は興奮する。戦前の旧制中学は五年制で、将来の定まらぬ多感な年ごろゆえ、教員の影響は大きかったと推測される。台南一中にいた歴史教師の前嶋信次（一九〇三—一八三年）は、その強い印象を、教え子の台湾語学者王育徳（一九二四—一九八五年）、美術史家上原和（一九二四年—）、郷土史家陳邦雄らに残した。¹⁵⁾二中の金子も師弟関係に恵まれ、葉石濤のみならず郷土史家の何耀坤も、金子から強い影響を受けた。¹⁶⁾

当時台南市周辺では、考古学の発掘が、金子壽衛男や、台南第一高等女学校に奉職していた國分直一（一九〇八—二〇〇五年）らによって、大きな興奮と熱意をもって進められつつあった。國分と翁長林正・萩原直哉の共著「台南台地に於ける先史文化遺跡に就いて 第一報・台南西南周縁部の遺跡及遺物」、『考古学』第十一卷第十号、一九四〇年十月）によれば、台南地方では明治末年以降、散発的に遺跡が発掘され、昭和に入ってから断片的な発掘がつづいていた。

考古学調査が本格化するのには、一九三八年四月、國分らが台南台地東南辺に位置する牛稠子遺跡（新豊郡車路墘を、七月に同じく台南台地南辺の十三甲遺跡を、さらに八月に高雄州岡山郡の大湖貝塚を発見し、石器や土器を発掘してからである。中でも大湖貝塚の発掘は大掛かりで、一九三八年十二月の調査では、台北帝大からも宮本延人・移川子之藏・金関丈夫らの学者が参加し、にぎやかな調査となった（宮本「大湖貝塚の調査」『南方土俗』第五卷第三・四号、一九三九年二月）。國分はその興奮を、「車路墘丘陵の新石器時代の遺跡がみつつかつて以来、新しい協力者が次々に出て、新発見が次々になされつ、ある事はなんといふ喜びであらう」と記した（隨筆 三本木高地）『台湾日報』一九三九年五月六日）。

この新しい協力者こそ、一高女の同僚翁長林正らであり、また二中の金子壽衛男であり、さらにその教え子たちが組織する博物同好会の面々だった。金子は考古学者ではなかったが、化石の発掘は先史時代の遺跡の発掘と重なることが多く、國分直一の教えを受けたり、一緒に調査に当たることがあった。この輪には、國分と親しかった一中の前嶋信次の教え子、陳邦雄も加わった。

國分は「台南台地に於ける先史文化遺跡に就いて」（前掲）に、一九三九年に「金子及台南二中博物同好会員によつて牛稠子の北方（台地東縁部）に綱寮高地遺跡、台地西北方周縁地方に三本木・六甲頂・永康・蔦松等の諸遺跡が発見されるに至つた」と記す。國分の一九四一年段階における総括的な報告「台湾南部に於ける先史遺跡とその遺物」（『南方土俗』第六卷第三号、一九四一年十一月）には、それまでに発見された遺跡の一覧が掲載されている。金子と博物同好会の活躍がよく分かるが、初発見者の中に、葉石濤の名前も計五箇所に見られる。綱寮遺跡の発見については、金子及び博物同好会員四名の一人として、六甲頂についても金子及び会員九名の一人として、芭蕉脚・竹篙厝B地点には会員四名の一人として、青葉町B地点については発見者として、葉石濤ただ一人の名が記されている。旧制とはいえ中学生だった葉の得意を思うべきだろう。

一九三九年、葉石濤が最初に発掘に加わったのは、台南市内の北辺、三分子練兵場（一中の北）にある、三本木高地である。この発掘については、國分直一が「隨筆 三本木高地」（『台湾日報』一九三九年五月六日）を発表している。國分の勤務先の一高女の同僚翁長林正や、遠足気分の一、二年の女生徒らと出かけた、日曜日の調査行が、ユーモアある筆致で描かれている。國分によれば三本木高地の遺跡は、「第二中学の三年生王金梅（江金培の誤記か、引用者注）君が土器の出るのに気づき金子壽衛男教諭に報告したに始まる。金子さんは台南台地の古生物を研究されてゐる人であり、王君は金子さんが特に目をかけてゐられる弟子である」という。

一九三九年二月に金子壽衛男と二中三年生の江金培が、化石を採集中に土器や石器類を発見した、高雄州岡山郡の

小崗山の調査には、五月以降國分も加わり、葉石濤も参加した。数次の調査を経て、年内にその報告である「小崗山発見の先史時代遺物」が、國分と翁長林正との共著の形で『民族学研究』に発表された。葉はこれ以外に、高雄州大湖の大湖貝塚、台南州隆田（番仔田）の国母山遺跡、高雄州の鳳鼻頭遺跡などでも発掘を行った。

五年生となった一九四二年の夏には、博物同好会のメンバー十数人で、テントや飯盒などを用意して露営の採集に出かけた。葉石濤が客家人に接触したのは、このときが初めてだった。そして一九四三年三月、卒業直前の調査では、隆田へ向かう列車から工事中の線路脇に遺跡を発見、次の新市駅で降りて、永康方面へと線路沿いに駆け戻った。金子によって蔦松遺跡と名づけられたこの遺跡は、七、八百年前の平埔族、恐らくはシラヤ人の集落の跡だという。葉によれば、「蔦松貝塚の発見は、台湾で初めての平埔族の遺跡の出現」だった。⁽¹⁷⁾

葉の考古学趣味は戦後にもつづき、一九八二年には蔦松遺跡でガラス質の陶環の破片を掘り当て、数日間興奮がやまなかったという（「西拉雅族的末裔」⁽¹⁸⁾）。

考古学の発掘経験から、葉石濤は、これらの遺跡を残した人々に対する関心をかき立てられた。葉は「考古夢」で、「私の考古学の夢は、四年の歳月を経て私が卒業し台北の『文芸台湾社』へと向かい就職したため終わりを告げた。しかしこの四年間で、私は科学者が真理を追究する精神を学び、台湾が古来多種族の移民社会であるという事実を認識した」と記す。⁽¹⁹⁾のちの葉の台湾文学観の根柢には、「台湾は、オランダ、スペイン、日本の侵略と統治を経たが、それはまた「漢番雜居」（漢族と原住民が雜居する）移民社会でもあったため、大陸社会とは異なる生活様式と民情がはぐくまれた」という台湾独自の性格への注視がある（『台湾文学史綱』「序」⁽²⁰⁾）。この認識の出発点となったのが、金子に連れられて従事した考古学の発掘だった。

二 平地先住民族への関心——國分直一と平埔族研究

葉石濤は考古学の発掘を通して、当時台南で考古学や民族学の研究に没頭していた民族考古学者の國分直一とも交流を持った。楊がシラヤ族についてより詳しく知るには、國分の啓発が大きかったと思われる。

十六世紀前半、オランダが拠点としたころの台南には、オーストロネシア語族の先住民族のうち、平埔族のシラヤ族が居住していた。⁽²¹⁾ 平埔族は平地や山麓部に居住していたため、台湾海峡を渡ってきた漢族と早くから接触し、漢化が進んで、日本統治期にはすでに、固有の文化や言語が失われつつあった。この平埔族のうち、台南から高雄・屏東にかけて住んでいたのが、シラヤ族である。⁽²²⁾

シラヤ族には、「四大社」と呼ばれる、新港社（新市）及び大目降社（新化）、目加溜灣社（善化）、蕭壠社（佳里）、麻豆社（麻豆）があった。その中でも新港社の人々は、もともとオランダが拠点を作った台南市の中心部、プロビンシャ城（赤嵌楼）あたりに住んでいたため、もともと早くに軍事面や経済面での交渉があった。また宗教や教育の面でもオランダの影響を受けた。オランダ統治期には、宣教師が新港社に入り込んで布教を行い、新港語をローマ字で表記し、福音書などキリスト教関係の文献を新港語に訳し、さらに新港語を用いて教育も行った。⁽²³⁾ 新港語は、新港社のみならず、周辺の他の社での布教・教育でも用いられたという。⁽²⁴⁾

新港社をはじめとするシラヤ族の人々は、まずオランダの影響を受け、さらに漢族の移民が大挙して渡来するのの前に、数度の移住を余儀なくされた。新港社の場合、最初にオランダに台南市周辺の土地を譲り、さらに漢族の移民の圧迫を受けて新市の東部へと遷る。また漢化が進み、固有の言語や習慣・信仰は失われていった。⁽²⁵⁾

しかしローマ字を用いた新港語は、オランダが去った後も、土地の売買や貸借の契約書として用いられつづけた。

清末から日本統治期初期にかけて収集された「新港文書」がそれで、オランダに残された新港語訳のマタイ伝や新港語の語彙集などとともに、失われたシラヤ語を知るための貴重な資料となった。⁽²⁶⁾

言語学者の小川尚義（一八六九—一九四七年）は、一九〇五年の時点で新港文書について、「此等文書才残シタ熟番人ノ子孫ワ今日デワ殆ンド全ク漢人化シテソノ固有ノ言語才忘レテシマツテイル」と記した（『蕃語文書ノ断片』⁽²⁷⁾）。歴史学者の村上直次郎（一八六八—一九六六年）は、一九三〇年の時点で、「新港社は最も早く支那人の移住した所であるから、従つて最も早く支那化し、此の地方に行はれたオランダ人の所謂新港語又はシデイヤ語を話す蕃族は現存せず、新港文書の蕃語を解する者は居ない」、「今は死語となつている新港の土語」と記した（『台湾蕃語文書』⁽²⁸⁾）。

一九三〇年代に入つて、この失われつつあったシラヤ族の新港語に注目し、現地で調査をする学者が現れる。きっかけとなったのは、台南で行われた台湾文化三百年の行事で、講演などをもとに『台湾文化史説』（台北…台湾文化三百年記念会、一九三〇年）が刊行された。ここに村上直次郎「蘭人の蕃社教化」「台湾蕃語文書」の二篇が収められ、オランダ統治期の新港社に対する教化について、オランダの資料をもとに詳細に紹介し、また新港文書を数多く紹介した。

実際にシラヤ族の言語は死滅したのか、一九三〇年代半ばに至り、現地で調査を行ったのが、前嶋信次と浅井恵倫である。⁽³⁰⁾

台南一中の教員だった歴史学者の前嶋信次（一九〇三—八三年）は、一九三〇年代半ば、地元紙『台南新報』に歴史散歩の文章を発表していた。⁽³¹⁾ 一九三七年の「初春訪古」のうち、二から五（一九三七年一月七—九／十二日）は、「シンカン語」と題し、探索の結果を報告する。前嶋が新港社の所在地である新市を訪ねたのは、前年一九三六年八月末のことである。台南から二つ目の新市駅で下車、現地の上地なる人物に教えを受けて、新港社の人々の子孫が住むという集落を訪ねた。しかし平埔族固有の生活習慣は失われ、服装も言語も漢族と変わりなくなっており、容貌が

漢族と異なるように見えるのみだった。老婆から伝来の祭りの衣装を見せてもらうことはできたが、「老人等から新港語を抜き出さうと努力したが、それは徒労に終つた」。あきらめ切れずに上地氏に依頼し調査をしてもらったところ、新市には言語を記憶する者はないが、知母義にはシンカン語を解する者が残っているとの報告を受けたという。

前嶋信次の調査の翌年、言語学者の浅井恵倫（一八九四—一九六九年）も調査を行った⁽³²⁾。浅井はオランダのライデン大学に留学した際に、ユトレヒト大学からマタイ伝の新港語訳を借り出し検討した経験を持つ。留学を終えた浅井は、退官した小川尚義の後継として台北帝大に赴任、一九三六年から平埔族の言語の調査を開始し、三七年二月に台南でシラヤ語の調査を行った。しかし、「菓寮、左鎮、芒子芒、玉井を風潰しに調べて歩いたが、芒子芒、岡子林に蕃曲を記憶する者数名あつた、言語は単語を記憶する程度」との結論だった（『台大言語学教室の平埔蕃調査』『南方土俗』第四卷第四号、一九三八年六月）。「彼等の固有言語は日常語として滅亡したと云つてよい。たゞ老人が若干の単語と歌謡を覚えてゐるに過ぎない」とも記した（『和蘭と蕃語資料』『愛書』第十輯、一九三八年）。

前嶋や浅井のシンカン語探索から刺激を受けて、その悲観的な調査結果にめげず、さらに追跡を行ったのが、國分直一である。⁽³³⁾ 國分は一九四一年夏、シラヤ族新港社の末裔が住むとされる、台南東北郊外の新市庄新店を訪ねた。その意図は、「せめて台南地方のシラヤ（Siraya）のいっただけでも探つて、まさに消滅せんとする魂の片鱗なり、習俗なりの一片でも採集しておきたいと思ふ念願」にあった。この新市の平埔族調査の報告は、「平埔族聚落を訪ねて新市庄新店探訪記」、及びグラフ写真の解説「新市庄の平埔族」として発表された（『民俗台湾』第六号、一九四一年十二月）。平埔族の古老に故事を聞いて回ったが、嫁入りの衣装を除き、言語をはじめ伝統的な習慣は失われていた。

新市訪問直後の一九四一年八月、今度は新港社の第二次の移動地、新化の知母義を訪ねた。その記録が「知母義地方の平埔族について」（『民族学研究』新第一卷第四号、一九四三年五月。ただし執筆は四二年八月）である。新化では、平埔族の信仰である祖神を祀る祭場「コンカイ」（公廨）は、キリスト教の普及により失われていたが、キリ

スト教徒ではない家では「アリツ」(「蕃仔仏」、他のシラヤ族では「阿立祖」と呼ばれる)を祀る習慣が残っていた。⁽³⁴⁾また、同じくシラヤ族の住む崗仔林からやってきた、平埔族の故事に通じる鄂朝来が、村の老婦人らとともに、十年ほど前まで歌われていたという平埔族の言語による「蕃歌」を聞かせてくれ、さらに鄂氏の祖母が務めていた「厝姨」について聞くことができた。さらに、礁坑仔からやってきた傅祥露は、後日台南まで、歌をローマ字で記したノートを持参したのみならず、これまでに採集したシラヤ族の語彙集をもたらしした。

國分が傅氏から受け取ったこの「傅氏採集平埔族語彙集」(國分『壺を祀る村 南方台湾民俗考』東都書籍、一九四四年にも収録)こそ、葉石濤が『西拉雅末裔潘銀花』でシラヤ語を記す際に用いたものだった。日本人学者による平埔族研究のうち、少なくとも國分の研究を、葉は戦前の当時において承知していた。考古学に夢中になっていた二中時代、「人類考古学の専門家」である國分直一にしばしば顔を合わせたといい、「私は國分先生の著作からいわゆる「生蕃」も「熟蕃」もともに古代のオーストロネシア語族に属することを知った。(中略)國分先生は平地に居住する「熟蕃」、つまり平埔族について深く研究していた。のちに國分先生は台南郊外の新市新店の集落でかつての赤嵌(サカム)社のシラヤ族末裔を訪ね、人々のシラヤ語を記録し、その生活風俗を把握した」と記している(「発現平埔族」⁽³⁵⁾)。葉には記憶違いがあり、國分自身がシラヤ語を記録したわけではなく、シラヤ族の子孫がもたらしたもので、また採集地は新市庄新店ではない。とはいえ、遺跡で直面していた平埔族の子孫が、現在も台南周辺に居住することを知った驚きは想像できる。

國分のシラヤ族探索、恐らくは『民俗台湾』掲載の新市庄新店採訪録に刺激され、葉石濤自身、一九四二年、中学四年生の春、新市に住む友人から連霧狩りに誘われた際に、友人にシラヤ族の末裔が住む場所に連れて行ってほしいと頼んだ。しかし友人はシラヤ族なる存在を知らず、住民全員がキリスト教徒の集落へと案内してくれたが、観察の結果は容貌を除き、衣服や言語など周辺の農民と異なる点は見当たらず、シラヤ語を一言も聞くことはできなかった

という。⁽³⁶⁾

葉石濤の國分の研究に対する注目は戦後もつづき、「台湾的先史時代」（『国語日報』一九八六年三月十九日）では國分の『南東南島先史時代の研究』（慶友社、一九七二年）を、「台湾的先史文化」（『台湾時報』一九八六年十月十九・二十日）では『台湾考古民族誌』（慶友社、一九八一年）を参照している。

葉石濤は談話の中で、『西拉雅末裔潘銀花』については質問された際に、「潘銀花については実は大変長い話があります」と語り、國分から刺激を受けて新市庄新店で蓮霧を食べながら進めた採訪を懐かしんだ。平埔族に対する関心について質問された際には、ユーモアを込めて、「台湾全土で恐らく私一人だけが十三、四歳から台湾のエスニシティの問題を早くも認識し、しかも現在に至るまで研究しつづけていますから、平埔族に関する研究は權威といってもいいでしょうね。（中略）もし私が当時の計画通り帝大に受かっていたら、今の中央研究院の人たちはみな私の弟子という事になったはずです」と語った。⁽³⁷⁾『西拉雅末裔潘銀花』へと至る構想が、長い時間をかけて準備されてきたことがわかる。その出発点には、金子や國分らに接することでかき立てられた、台湾の平地先住民族に対する関心があり、それが五十年の時を経て『西拉雅末裔潘銀花』へと結実したのである。

おわりに

葉石濤は談話「台湾文学的点灯人」で、自身の文学について次のように語っている。

私が鍾肇政（一九二五生まれ、葉と同世代の作家）と異なる最大の点は、小説を書く前に先に理論的な基礎を作りに上げていたことです。台湾は多民族の国で、台湾には台湾特有の歴史的な要因があり、発展してきた生活様式や

風土民情は中国大陆と明らかな違いがあります。多民族の相貌を持つ台湾文学を明らかにするために、私は八十年代に『台湾文学史綱』を完成させたのち、小説の筆を再び執って、続々と『西拉雅族的末裔』や『誠旨』、『異族的婚礼』などの作品を書きました。これらの小説は、私の作り上げた台湾文学理論の実践です。⁽³⁸⁾

葉石濤のいう「多民族の相貌を持つ台湾文学」には、山地や平地の先住民、中国の福建省や広東省から台湾海峡を渡ってきた本省人、国民党とともに来た外省人が含まれ、そこに日本など台湾を統治した外来政權の要素が加わる。この台湾の多民族の相貌を体现する存在といえるのが、オランダ統治期にその文化に触れ、やがて浸入する漢族の前とときに内陸へと移動しときに同化していった、多元的な存在としての平埔族である。

葉石濤は葉家の祖先を語った「童年生活」で、詳細はよく分らないと断りながら、祖先にシラヤ族が関わっているのではないかと推測している。葉家の出身地である台南県龍崎郷苦苓湖地方はシラヤ族の集落で、のちに漢族が進入したという。葉自身若いころ訪ねたことがあるが、祖先がシラヤ族の集落に足を留めた漢族なのか、あるいはもしかすると客家人なのか、それとも家譜を捏造したシラヤ族なのか分からない、「葉家が漢族でないならシラヤ族との混血というのがおおよそ事実に近いだろう」と推測する。⁽³⁹⁾この推測にどの程度根拠があるのか不明だが、葉が台湾人としての自身を認識する上で、平埔族の存在を積極的に受け入れていることはわかる。

葉石濤が台湾社会の多民族な性質に対し関心を抱くに至った出発点には、一九三〇年代から四〇年代の前半にかけて、台南で教員をしながら歴史学・民俗学・考古学・民族学・生物学・文学などの領域で活動した、前嶋信次・國分直一・金子壽衛男らの存在があった。彼らの研究活動は、台南という土地を対象としながら、台南に積み重なった歴史的な地層を掘り進むことで、台湾の文化的な多元性を明らかにしていくものだった。⁽⁴⁰⁾葉はこの日本人学者たちから受けとった、台湾という土地の性質を考える上での刺激の種を、台北での台湾人作家たちとの交流、台南や高雄での

長い小学教師生活、三年間の獄中生活、沈黙を経て再びの執筆活動と経歴を重ねる中で、水をやり、肥料を与え、やがて花開かせた。日本統治期に日本人が開拓した研究が、戦後の台湾研究の基礎となった分野は数多いが、台南という地方都市の日曜研究者たちのひそやかな実地調査もその一つで、やがて葉石濤という作家において実を結んだのだった。

* 日本語文献は引用に際し旧漢字を新漢字に改め、ルビは省略した。中国語文献の引用はすべて拙訳による。

* 本稿は国際シンポジウム「文化翻訳／翻訳文化」（東アジアと同時代日本語文学フォーラム、台湾新北市・輔仁大学、二〇一五年十一月十四日）での口頭発表に加筆・修正したものである。

* 本稿は平成28年度科学研究費補助金基盤研究(C)「台南文学の研究—日本統治期の台湾人作家を中心に」（課題番号15K02446）による研究成果の一部である。

注

(1) 葉石濤の年譜としては、「文学年表」（彭瑞金編選『台湾現当代作家研究資料彙編15 葉石濤』台南：国立台湾文学館、二〇一一年）、自伝としては、「一個台灣老朽作家的五〇年代」（台北：前衛出版社、一九九一年）など、数多くの散文を参照した。人生を回顧した談話には、『口述歴史 台湾文学者碩 葉石濤先生訪問記録』（張守真主訪・臧紫麒記録、高雄：高雄市文獻委員會、二〇〇二年）がある。伝記に、彭瑞金『葉石濤評伝』（高雄：春暉出版社、一九九九年）、陳明柔『我的労働是写作 葉石濤傳』（台北：時報文化出版、二〇〇四年）、論文集に、鄭炯明編『越浪前行的一代 葉石濤及其同時代作家文学國際學術研討會論文集』（高雄：春暉出版社、二〇〇二年）、彭瑞金編『文学暗夜的领航者 葉石濤先生紀念文集』（高雄：春暉出版社、二〇〇九年）などがある。

(2) 『葉石濤先生訪問記録』（前掲、六五頁）によれば、他に巫永福・張文環・呂赫若らの面識も得たという。

(3) 葉石濤の著作の引用は、注記のない限り『葉石濤全集』の拙訳に拠る。

(4) 涂淑玲・劉惠平編輯『没有土地哪有文学 葉石濤文学地景踏查手冊』（台南：台南市政府文化局、二〇一三年）、「葉石濤文学地図」（台南一中105級科学班『府城文学地図』台南一中、二〇一四年）など。

- (5) 陳正雄「葉石濤文学之旅」(涂淑玲・劉惠平編輯『沒有土地哪有文学』前掲、一九頁)。
- (6) 陳秀卿・林玲玲「發現平埔 葉石濤與西拉雅族書寫初探」(『黃埔學報』第六十四期、二〇一三年)。
- (7) 中島利郎訳『シラヤ族の末裔・潘銀花 葉石濤短篇集』(台湾郷土文学選集Ⅳ、研文出版、二〇一四年)。
- (8) 葉「台湾小説裡的平埔族」(『聯合文学』第百五十二期、一九九七年六月)。「葉石濤全集」第九卷所収、前掲、四二四頁)。王幼華の著書には翻訳がある、石其琳訳『土地と靈魂』(中国書店、二〇一四年)。
- (9) 葉「我的客家經驗 戴國輝『台湾与台湾人』読後」(『台湾文芸』第百五期、一九八七年五月)。ただし引用は『葉石濤全集』第八卷(前掲、五頁)に拠る。
- (10) 葉「口述歴史 台湾文学者頌 葉石濤先生訪問記録」(前掲、四三頁)。
- (11) 葉「光復前後の小学教師」(『自立晚报』一九八五年九月二十八日)や自伝『一個台湾老朽作家的五〇年代』(台北・前衛出版社、一九九一年)の「幼、少年時代」にも、金子から受けた影響や考古学への愛着についての記述がある。
- (12) 葉「考古夢」(『民衆日報』一九九八年一月十八日)。ただし引用は『葉石濤全集』第十卷(前掲、二五―六頁)に拠る。
- (13) 金子については、岡本正豊「金子壽衛男先生と貝の思い出」(『ちりばたん』第三十二卷第三・四号、二〇〇二年八月)、何耀坤「金子壽衛男対台南自然文化史的貢献」(『台南文化』第五十四期、二〇〇三年三月)を参照。
- (14) 葉「考古夢」(『民衆日報』一九九八年一月十八日)。ただし引用は『葉石濤全集』第十卷(前掲、二六頁)に拠る。
- (15) 拙著『台南文学 日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』(関西学院大学出版会、二〇一五年)の第二章「前嶋信次の台南行脚 一九三〇年代の台南における歴史散歩」を参照。
- (16) 何耀坤「金子壽衛男対台南自然文化史的貢献」(『台南文化』第五十四期、二〇〇三年三月)。
- (17) 葉「考古夢」(『民衆日報』一九九八年一月十八日)。ただし引用は『葉石濤全集』第十卷(前掲、三五頁)に拠る。
- (18) 葉「西拉雅族の末裔」(『民衆日報』一九八二年三月七日)。ただし引用は『葉石濤全集』第六卷(前掲、二九一頁)に拠る。また「彩陶」(『自立晚报』一九八三年四月六日)。「葉石濤全集」第六卷所収、前掲)には思う存分発掘に行く時間を持ってない憾みが書かれている。
- (19) 葉「考古夢」(『民衆日報』一九九八年一月十八日)。ただし引用は『葉石濤全集』第十卷(前掲、三七頁)に拠る。
- (20) 葉『台湾文学史綱』(高雄・文学界雜誌社、一九八七年)の「序」。ただし引用は中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』(研文出版、二〇〇〇年)の「原序」に拠る。
- (21) 平埔族については、張耀銓「台湾の平埔族 序説」一・二(『南方文化』第六・七号、一九七九・八〇年)、清水純「平埔族」(日

本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究への招待』風響社、一九九八年)、森口恒一・清水純「平埔族の研究」(日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧 日本からの視点』風響社、二〇〇一年)、潘英編著『台湾平埔族史』(南天書局、一九九六年)、潘朝成・劉益昌・施正鋒合編『台湾平埔族』(前衛出版社、二〇〇三年)、陳玉萃他『看見平埔 台湾平埔族群歷史与文化特展專刊』(國立台灣歷史博物館、二〇一三年)を参照した。

- (22) シラヤ族については、清水純「平埔族 シラヤ(西拉雅族)」(日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧』前掲)、劉斌雄「台湾南部地区平埔族的阿立祖信仰」(『台湾風物』第三十七卷第三期、一九八七年)、劉還月「南瀛平埔誌」(台南県文化局、一九九四年)、同「尋訪台湾平埔族」(常民文化、一九九五年)、涂順從「南瀛公廨誌」(台南県文化局、二〇〇二年)、楊森富「台南県平埔地名誌」(台南県文化局、二〇〇三年)、謝仕淵・陳靜寛主編『行脚西拉雅』(國立台灣歷史博物館、二〇一一年)を参照した。

- (23) 平埔族の言語については、小川尚義「台湾の蕃語に就て」(『台湾時報』第四十九号、一九二三年)、小川尚義・浅井恵倫「原語による高砂族伝説集」(刀江書院、一九三五年)、小川尚義「インドネシア語に於ける台湾高砂語の位置」(太平洋協会編『太平洋圈 民族と文化』上、河出書房、一九四四年)、土田滋「オーストロネシア語族」「高砂族諸語」「平埔族諸語」(『言語学大辞典』第一―三卷、三省堂、一九八八―一九九二年)、同「平埔族諸語研究雜記」(『東京大学言語学論集』第十二号、一九九一年)を参照した。

- (24) 村上直次郎「蘭人の蕃社教化」(『台湾文化史説』台北・台湾文化三百年記念会、一九三〇年)。

- (25) 平埔族の漢化については、山路勝彦「文明との邂逅と平埔族の漢化」(『台湾原住民研究』第一号、一九九六年五月)を参照。

- (26) シラヤ語の資料については、小川尚義「蕃語文書ノ断片」(『台湾教育会雑誌』第三十九号、一九〇五年)、村上直次郎「台湾蕃語文書」(『台湾文化史説』台北・台湾文化三百年記念会、一九三〇年)、浅井恵倫「和蘭と蕃語資料」(『愛書』第十輯、一九三八年)、土田滋「シラヤ語」(『言語学大辞典』第二卷、三省堂、一九八九年)、同「平埔族諸語研究雜記」(『東京大学言語学論集』前掲)、李壬癸編著『新港文書研究』(中央研究院語言學研究所、二〇一〇年)を参照した。

- (27) 小川尚義「蕃語文書ノ断片」(『台湾教育会雑誌』第三十九号、一九〇五年)。

- (28) 村上直次郎「台湾蕃語文書」(『台湾文化史説』台北・台湾文化三百年記念会、一九三〇年、二二四頁)。

- (29) 日本統治期の日本人による平埔族研究については、翁佳音「日治時代平埔族的調査研究史」(『台湾風物』第三十七卷第二期、一九八七年)、シラヤ族については、石萬壽「台湾的拜壺民族」の第一章「台湾南部平埔族研究的回顧与展望」(台北・台原出版社、一九九〇年)。

- (30) 日本による統治が始まる前から、清末から台南に住んで布教活動を行っていた、キャンベル牧師は、キリスト教徒に続々改宗した平埔族について、オランダ語を用いた研究を進めており、前嶋はこの研究も参照した。*Formosa under the Dutch: Described from Contemporary Records, with Explanatory Notes and a Bibliography of the Island.* London: Kegan Paul, 1903.
- (31) 拙著『台南文学』（前掲）の第二章「前嶋信次の台南行脚」を参照。
- (32) 浅井の台湾諸語研究については、土田滋「人と学問 浅井恵倫」（『社会人類学年報』第十号、一九八四年五月）、笠原政治「画像資料 概説」（三尾裕子・豊島正之編『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇〇五年）。
- (33) 拙著『台南文学』（前掲）の第五章「國分直一の壺神巡礼 ハイブリッドな台湾の発見」を参照。
- (34) 平埔族の壺を祀る習慣については、劉斌雄「台湾南部地区平埔族の阿立祖信仰」（『台湾風物』第三十七卷第三期、一九八七年）、石萬壽『台湾的拝壺民族』（台原出版社、一九九〇年）、段洪坤「阿立祖信仰研究」（台南市文化局、二〇一三年）、小林栄「シラヤ族における宗教的変容 阿立祖崇拜をめぐる」（『神学研究』第二十四号、一九七六年二月）を参照。
- (35) 葉「發現平埔族 我為什麼写『西拉雅末裔潘銀花』（『文訊』第百七十八期、二〇〇〇年八月）。ただし引用は『葉石濤全集』第十卷（前掲、二七一頁）に拠る。
- (36) 葉「發現平埔族 我為什麼写『西拉雅末裔潘銀花』（『文訊』第百七十八期、二〇〇〇年八月）。ただし引用は『葉石濤全集』第十卷（前掲、二七一頁）に拠る。
- (37) 葉「從考古学到文学」（『文学經典与台湾文学』二〇〇二年一月）。ただし引用は『葉石濤全集』第十二卷（前掲、三八三―四頁）に拠る。
- (38) 葉「台湾文学的点灯人」（『国文天地』第十八卷第二・三期、二〇〇二年七月・八月）。ただし引用は『葉石濤全集』第十二卷（前掲、四二〇頁）に拠る。
- (39) 葉「童年生活」（『文学台湾』第四十八期、二〇〇三年十月）。ただし引用は『葉石濤全集』第十卷（前掲、二九七頁）に拠る。
- (40) 前嶋・國分・新垣宏一ら「台南学派」の活動については、拙著『台南文学』（前掲）を参照されたい。